

空軍ニュース：日米による台湾防衛支援の必然性

漢和防務評論 20170303 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

最近、中国空軍の戦爆連合航空機群が宮古海峡を通過し、台湾東岸に進入しました。

中国軍は、台湾の生存を断つためには是非とも台湾東岸の空軍基地を攻撃する必要があります。中国空軍のこの作戦行動は、日本の防空識別圏を通過しなければ不可能であり、日本も必ず紛争に巻き込まれることになります。

台湾西岸の航空基地が破壊された場合、沖縄県の離島飛行場に台湾空軍の戦闘機が緊急着陸する可能性があります。

台湾が攻撃を受けた場合、米国が介入することは必定ですが、日本も米軍支援の形で間接的に参戦することになるのか、この問題について十分研究する必要があります、と KDR は指摘しています。

沖縄の米軍基地は、中国の台湾攻略作戦に最も邪魔な存在であることは自明です。沖縄の反基地運動が様々な色彩を帯びていますが、この観点を無視することはできません。

KDR 平可夫東京特電：

日本の防衛省が 2016 年 11 月 25 日発表したところによると：H-6K 戦略爆撃機 4 機、TU-154 電子偵察機 1 機、Y-8 電子偵察機 1 機、戦闘機 2 機（一説によると SU-30MKK）が宮古海峡を通過し台湾東岸に進入した。宮古海峡を通過し台湾東岸に進入したのは初めてである。日本の戦闘機が緊急発進し監視に当たった。類似規模の戦闘機の活動は、2016 年 9 月にも起きている。防衛省の率先通報により、台湾戦闘機も迎撃したのであろうか？しかし台湾国防部はコメントを出していない。KDR はこの姿勢は間違っていると思う。台湾の聯合報によると：台湾戦闘機は迎撃しなかった、という。このあたりの状況について、台湾国防部は明らかにする必要がある。

KDR は次のように考える：これは、一旦中台間で開戦となれば、日本が戦争に巻き込まれる危険性が明らかに増加することを意味する、と。これは KDR が早い時期から予測していたことである。中国は、明らかに台湾東岸に関心を持ち始めた。航続距離の長い戦闘機及び艦載戦闘機を使って台湾東岸の目標を如何に攻撃すべきか？第一の攻撃目標は、花蓮空軍基地及び台東の地下式空軍基地であり、この基地を最初に破壊しなければ、台湾空軍は 200 乃至 300 機の戦闘機を温存できるのである。

中国空軍のこの作戦行動は、彼らがすでに台湾海峡及び台湾本島西岸の制圧に自信を持つに至り、したがって台湾東岸の制空権、制海権確保が必要になった、と見ている。

H-6K は宮古海峡を通過し、直接台湾本島東岸から 800 乃至 1000KM の距離に

進入した。この位置は **KD-20** 型巡航ミサイルの発射位置である。そのほか **CLUB** ミサイルを複製した多用途ミサイルを搭載した中国潜水艦が今後この地区に常時進出する可能性がある。

中国海空軍が台湾東岸に進出し行動するためには、単にこの海峡を通過するというだけでなく、日本及び台湾の防空識別圏を通過することを意味する。日本及び台湾の防空識別圏はこの地区で重なっており、航空自衛隊の消息筋は以前 **KDR** に対し：実際、台湾空軍のミラージュ 2000-5 は、台湾の東北海岸上空で恒常的に訓練しており、日本の戦闘機は何度も発進して監視してきた。あるときは、台湾戦闘機が相当先進的な電子対抗措置を採った、と述べた。これは 1990 年代のことである。

今後、中国戦闘機が台湾東岸に進出するのが常態化するのだろうか？

KDR の判断は、**YES** である。

過去 5 年来、一連の”漢和指揮所図上演習”において以下の結論に達している。台湾東岸は台湾生存にとって極めて重要である、と。

1. たとえ中国軍が上陸に成功したとしても、台湾軍が中央山脈の交通路を守りさえすれば、台湾東部地区は依然として花蓮、台東の作戦戦力に依存することができ、その結果、数ヶ月以上の抵抗が可能になり、東台湾の独立を宣言するチャンスも出てくる。

2. 東岸を守りきれば、日米の軍隊による必要な援助が可能になり、花蓮、台東を中心として、米軍の戦略空輸作戦が日本を経由して行われる。**KDR** の図上演習では第 4 次中東戦争の教訓を十分に考慮した。米軍の戦略空輸がなければ、イスラエルは戦争を継続することができなかった。日米はすでに”軍用物資互換”協定を締結しており、一旦開戦となれば、米軍の支援は、日本から直接行われる可能性がある。

3. また **KDR** は、開戦後の台湾西岸飛行場の受ける損害を計算した。多くの戦闘機は、臨時に日本の離島飛行場に退避を迫られる。**KDR** がこれらの飛行場の滑走路の長さを計算したところ、どの飛行場も台湾 **F-16** の緊急着陸が可能である。通常、**F-16** の緊急着陸には少なくともバリア付きの 2000M の滑走路が必要だ。東岸が持ちこたえられなければ、このような緊急着陸作戦は不可能である。したがって **KDR** は以前から次のように予測していた：一旦開戦となれば、戦火は東岸に延伸し、日本も戦争に巻き込まれる可能性がある。言うまでもなく、戦闘機、水上艦艇は日本の防空識別圏を通過する。交戦中の中国および台湾の戦闘機は双方とも日本の領空に侵入する可能性が極めて高い。上述の図上演習を通じて、**KDR** はすでに日本の防衛省に対し直面する可能性のある課題について注意を喚起した。

4. 一旦、中国戦闘機の東岸進入が常態化すると、日中双方の迎撃、反迎撃の問題を考慮しなければならない。このように重大な軍事行動を、なぜ防衛省は率先してニュース発表しないのであろうか？しかも台湾国防部は事後に確認した

のだろうか？台湾戦闘機及び早期警戒機は上空で監視しなかったのか？ことは重大である。これは”軍事機密”でも何でも無い。技術的に見て、台湾の各種防空レーダーは、300乃至400KMの範囲を感知できる。E-2C2000早期警戒機は有効に追跡することができる。

NATO軍機と旧ソ連/ロシア戦闘機の異常接近について、冷戦時代も現在も、旧ソ連/ロシア国防省はテレビを通じて双方戦闘機の飛行経路を詳細に把握している。日本の防衛省も関連情報を公表した。これが普通の国家のやり方である。

5. 中国は、最近J-16に搭載した新型長距離ミサイル(PL-15?)の写真を大々的に公表した。したがってJ-16が今後東岸に進入した場合、E-2C2000はJ-16のミサイル攻撃を回避するため、監視区域から退避を迫られる可能性がある。米露が開発した類似の空対空ミサイルの射程は、通常400KMであり、パッシブ弾頭を取付けている。(シーカーはレーダー周波数を追跡することができる)

6. 中国戦闘機及び潜水艦が東岸に進入すると、台湾海軍にはもはや安全な水域はなくなる。基隆に配備されたKIDD級ミサイル駆逐艦は常時この海域で活動している。KIDDは、中国ロケット軍、中国空軍が常時考えている攻撃目標であり、中国西部のホルミサイル射場にはKIDDの全寸模型が設置されている。

7. KDRの判断が正しければ、今後中国空軍の各種電子偵察機が頻繁に東岸に進入し、同時に日本軍及び台湾軍の電磁周波数、特に地対空ミサイルレーダーの信号情報を収集するであろう。この情報を入手することによって、戦時、J-16、SU-30MKK、J-15戦闘機はYJ-91の類のミサイルで地対空ミサイルを破壊することができる。

8. 政治的に微妙な時期に、このような大規模の航空機群が東岸に進出することは、中国当局が蔡英文政府の政治的立場に極めて不満であることを示しており、今後再び”軍事闘争準備”の時代に戻ると思われる。KDRは、十九大後の中台関係を楽観していない。

9. 中国空軍の出動機種を見ると、H-6K、TU-154、SU-30MKKであり、爆撃機部隊、戦闘機部隊、特種航空機部隊に集中し、明らかに聯合作戦能力が向上している。このような聯合飛行には、指揮の一体化及び通信の問題を解決しなければならない。KDRの判断が正しければ、この種の作戦行動においては、東シナ海聯合作戦指揮センターが統一指揮を行っていると思われる。KDRはこのセンターの存在を報道したが、この情報は関連する国家の強い関心を引いた。

以上